

本館
所蔵

古文書摘録 (三)

——近江国蒲生郡上駒月古券（二巻八通）——

柴 辻 俊 六

一 はじめに

本館所蔵の古文書のうちに、「駒月古券」と題する一巻八通の文書集がある。大正六年に本館で購入したものが、それ以前の伝来関係については一切不明のものである。「駒月」とは、現在の滋賀県蒲生郡日野町上駒月のことで、この文書集は、本来この地方に伝来すべき性質のものであった。つまり、ここである「古券」とは、田地売券や坪付状を総称する意味で付されたものであって、これ自体、他に特別の意味は持っていない。その中に、とくに室町期の坪付状（その形態については後述）が多く入っていることから考えて、また、地域的に近江という、従来の中世村落史研究で問題とされている地域なので、ここにその紹介の労をとり、併せて、若干の考察を加えてみたいと思う。

この文書集と同一内容のものの一部が、すでに大正十一年編集の『近江蒲生郡志』に四通程入っている。そこでの所蔵者名は、「南比郡佐村大字上駒月・岸村庄太郎氏所蔵文書」とされている。現地調査をしていないので、現在その文書がどうなっているのかは知るよしもないが、あるいは本館所蔵のものも、かつて同家で所蔵していたものかも知れない。

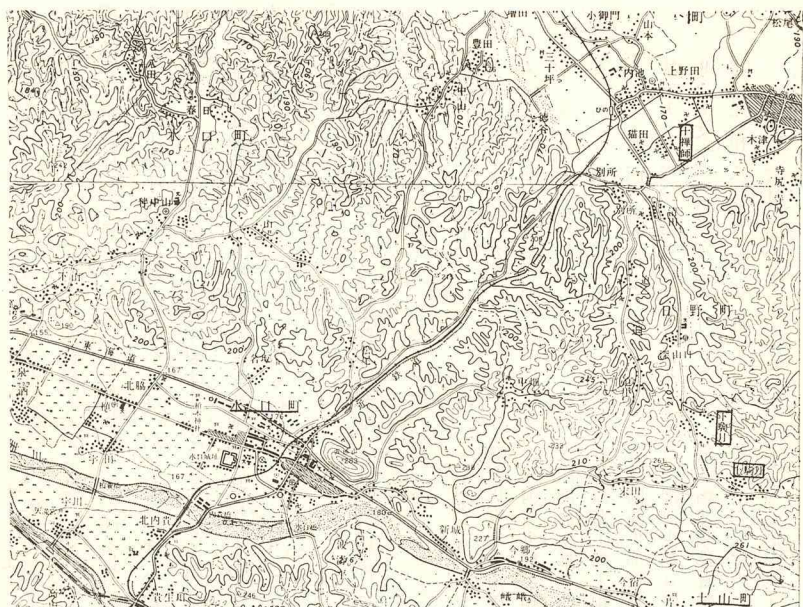
坪付状とは、勝峯月溪氏の『古文書学概論』によれば、「土地の坪付等を領主に注進したもので、田文とも称し、注進状、注文

の一種である」という。つまり、律令制下の公式令による坪付帳や田文（図田帳・検注帳）のことであるが、後にその本文を紹介するように、ここでいう坪付状の意味は、それらとは若干性格を異にしていると思われるのである。つまり、各文書の「事書」の部分に、「請坪付状」とみえることから考えて、いわゆる坪付帳（状）・田畑注文に対する請取書の意味であると考えるべきである。その実際上の手続きに関して述べれば、何年かに一度（本郷の場合六年ごと）、莊園領主側から検注使が在地に下向し、その監督のもとで在地側が坪付帳を作製する。それに対して領主側がその坪付帳を請取ったことを証するために、その田畑に対する貢納収取関係を明記した「請坪付状」を在地側に与えたものであると考える。その例証として、本文書⑨の端裏書に同じものの表現を「太神宮請帳」としてしていることもわかる。それ故、この文書の性格は単なる請取状というより、近世文書でいう「年貢割付状」に近いといえる。

次に本巻に収録されている古券類の目録を、年代順は不同になるが、その収録順に従って摘記してみると、（文書ネームは筆者仮称）

- | （文書番号） | （年 月 日） | （文 書 名） |
|--------|----------------|-------------------|
| ① | 貞治五（三六）年十二月廿七日 | 藤原氏女熊若山野売券 |
| ② | 応永五（三八）年十月 日 | 近江国蒲生郡上駒月請坪付状（断簡） |
| ③ | 長享二（四八）年十二月四日 | 近江国蒲生郡上駒月請坪付状（断簡） |
| ④ | 明応九（五〇）年霜月七日 | 近江国蒲生郡上駒月請坪付状 |
| ⑥ | 大永四（五四）年十一月 | 近江国蒲生郡日野牧請坪付状 |
| ⑪ | 天文廿三（五四）年（欠） | 近江国蒲生郡日野牧請坪付状（断簡） |
| ⑨ | 天文十一（二五）年十一月 | 近江国蒲生郡日野牧請坪付状 |
| ⑫ | 元和八（六三）年正月吉日 | 伊勢内宮風宮内人某掟書 |

なお、右目録中、⑤・⑦・⑧・⑩は、『近江蒲生郡志』に所載のもので、ここでは除外した。詳細は後掲の収録文書を参照されたい。



⑫以外の総てが室町期のもので、しかも前述したように、内容的にも①・⑫を除いて他は全く同一形式のものであることが知れよう。ただし、後に紹介するように、②・③・⑪は文書の前半部を大きく失っているが、形式・内容などの検討から、その他の文書との比較によって、容易にその原文を復原できるものである。

二 近江国蒲生郡上駒月について

上掲の地形図でも明らかなように、上駒月は、日野川の奥で、日野町より東海道今郷への間道沿にある。蒲生郡のうちでも南部の丘陵地帯に属し、旧来より駒月谷といって、甲賀郡へ抜ける谷あいの小集落であった。現在でも戸数は数十戸で、耕作地は水田が主であるが、その一戸当りの面積は狭少のようである。現在でこそ、等高線の二百メートル以上にも水田が見られるが、はたして中世においてはどの程度の開発が進んでいたかは不明である。

『近江蒲生郡志』によると、鎌倉期以降室町末期まで、一貫して伊勢神宮領であり、同じ駒月谷には、他に日吉社領・

狛月氏領もあったという。元來、近江には、比較的伊勢神宮領が多く、蒲生郡に限ってみても、佐々木御厨や蒲生御厨などのようにかなり拡大な領域をもつて、比較的長期間にわたつて、神宮領として実質的な機能を果していたところが多い。また近江蒲生郡は、山間部を除いてほぼ全域にわたつて、条里制が施行され、またその遺構（地名など）のよく残っているところであるが、同じく『近江蒲生郡志』の挿図（六二頁）をみても、問題の上駒月の一つ北部の郷である下駒月は、九条一里に属しており、従つて、今は明らかでないが、条里制に従つた一定の坪付が行われていたものと思われる。ただ、上駒月の場合、条里制施行の形跡は見当らず、従つて文書中にもはっきりした坪付記載はでてこない。

伊勢神宮領のある一部の地域については、いくつかの個別研究があるが、近江あるいは蒲生郡に関する体系的なものは、まだ見当らず、昭和二年発行の『滋賀県史』でも部分的な記載しかしていない。現在のところ、滋賀県下の旧版の各郡誌がもっとも多くの史料を提供しているようである。深沢鎮吉氏の「伊勢神宮神領の研究」（歴史地理第二十巻四号）でも、若干、近江のことにふれてはいるが、それによると、近江国内での朝廷より神宮への寄進地として、

○後朱雀天皇・長暦二年（一〇三〇）→二十五戸

○後冷泉天皇・永承三年（一〇四六）→二十五戸

○鎌倉期、近江には御厨七ヶ所が存在した。

といったことしか明らかにされていないが、しかし、この事実が後に神領の母体となつていく過程は、他所の例からも容易に推定できる。また、前記『近江蒲生郡志』の説明をみても、右同様であるが、佐々木御厨については、やや詳しい記録があり、「天承元年九月（二三）、白河法皇の崩御に仁子女王が法皇の冥福を祈るために、新たに外宮に田二十町三反を寄進した」（一九五頁）とある。これらの少ない事実関係から、蒲生郡内にあつた伊勢神宮領としての上駒月を、その發生にまで遡つて理解することは困難であるが、一応の推定としては、後述するように、郷内保組織の残存などから考えて、かつて国衙領であつたものが、一定の期間、皇室御領となり、平安末の院政期に、伊勢神宮領として寄進されて成立したのではないかと思う。こういった数少ない伊勢神

宮領関係の史料として、以下に紹介する古券類は、それが室町期に限られるものではあるが、単に神宮領の部分的な解明ばかりではなく、在地での神宮領としてのあり方をさぐるうえに有効なものとなりえよう。

また、もう一つ注目されることは、研究史的に中世後期の惣・郷を中心とする村落構造を解明する場合に、近江におけるそれが典型的であるとして、従来、同じ蒲生郡内得珍保の今堀郷や、湖北の菅浦郷が多く取りあげられていることである。上駒月にはそういう意味での地理的条件、歴史的条件はとくに見当たらないが、隣接地域の在地構造をみるうえでは、充分に間接的史料となりうるものである。つまり、ごく最近、丸山幸彦氏が「中世後期荘園村落の構造」(日本史研究一一六号)で明らかにしているように、得珍保の今堀郷が山門領庄園として、南北朝期を契機として、荘園内の名一散田体制の中から、神田(今堀郷日吉神社の免田)を中心とする共有田を基盤に、加地子得分田の増加とあいまって、村落内上層農民が在地領主と対抗して、郷Ⅱ官座の経済的基盤を強化し、それを媒介として小規模な名小作・散田請作を行っている中下層農民を郷に結集していくといった傾向が、伊勢神宮領上駒月あるいは日野牧においても追求され得ないかといった意味においてである。

三 上駒月古券の紹介と補注

次に、本館所蔵の上駒月郷文書を中心に、それと密接な関連をもつ『近江蒲生郡志』所載の同郷文書四点とともに、その全文を紹介してみたい。ここでは便宜上、年代順に配列し、それぞれ簡単な補注を加えた。

貴渡先祖相傳山林荒野事

合堂所者 直能米老石髓請取早納并定

在近江國蒲生上郡上狗月内字堤の小谷の

西北の所なり

限東限北

限南大夫作畠を

限西峯のミを里の水落限北西殿林

右件山林荒野者藤原氏熊若女相傳之領地也然而依要用河内殿内限永代売渡

知左記明白也雖湊本證文相副依有類地連券不能副渡然者雖輕後々代々不有

違乱煩者仍為向後龜鏡賣券之狀如件

貞治五年 丙午十二月廿七日

藤原氏女熊若 (花押)

尼妙恵 (花押)

尼妙恵

尼妙恵

① 藤原氏女熊若山野売券 (28.6×41.0)

売渡 先祖相伝山林荒野事

合宅所者 直能米老石髓請取早納并定

在近江國蒲生上郡上狗月内字堤の小谷の

西北の所なり

限東限北

限南大夫作畠を

限西峯のミを里の水落限北西殿林

右件山林荒野者藤原氏熊若女相伝之領地也然而依要用河内殿内限永代売渡

知右記明白也雖湊本證文相副依有類地連券不能副渡然者雖輕後々代々不有

違乱煩者仍為向後龜鏡賣券之狀如件

貞治五年 丙午十二月廿七日

藤原氏女熊若 (花押)

尼妙恵 (花押)

尼妙恵

注1 神領内において、在地領主が相伝の田畑・山野を売買することは、他の公田・名田などと同じく一般的なことであったことが、『近江蒲生郡志』二〇四頁の応永二年の野口源次郎兵衛売券などで明らかにされている。

② 近江国蒲生郡上駒月請坪付状 (27.4×33.2)

合恒元秘佐郷

駒月谷へ東六段

東新へ開一反

谷脇へ一段

榎木西二切東新開へ一段内へ三百三十

へ以上上町五段へ三百へ三十歩

へ本田七段三百三十歩 分米へ三石へ三斗七

右請坪付状如件

応永五年 戊戌 十月 日

保司代

注1 前欠であるが、④と比較する時、年代が百年余を経て

いても、その数値が全く同一であることから、その前

欠部分を補填することが可能である。

2 本文中のへ(合点)は朱書である。以下の文書も総べ
て同じ。

③ 近江国蒲生郡上駒月請坪付状 (28.4×24.8)

へ榊本百文

限東大上宮北へ牧山犬引西へ千本を□へ清水林かきる南へ□
たて道をかきる西へ十三枚をかきる

検注使権禰宜渡会神主へ文忠(花押)

保司代(花押)

右請坪付状如件

へ長享貳年 戊申 十二月四日

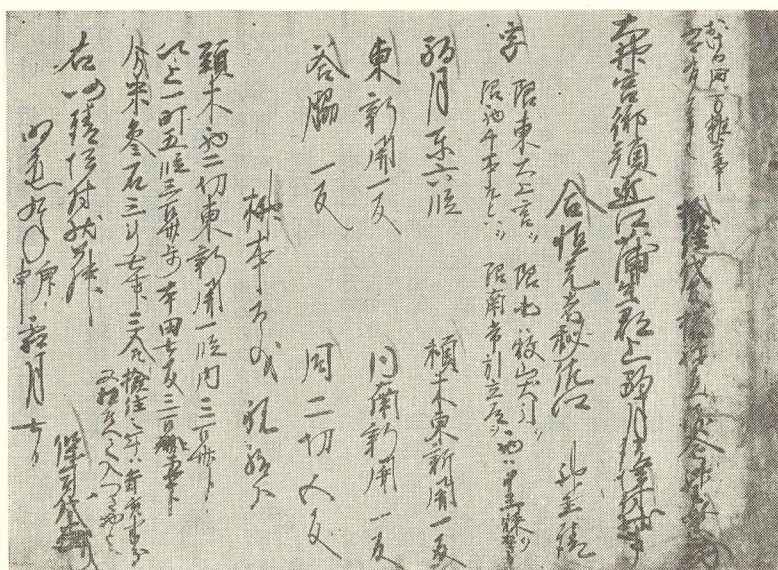
注1 これも前欠であるが、②と同様、④を参照することに
よって、容易にその前欠部分を復原できる。

④ 近江国蒲生郡上駒月請坪付状 (28.0×36.7)

(異筆)
於此内田ニ万雑公事
不可有之旨也

へ検注代官権禰宜渡会神主へ文忠(花押)

大神宮御領近江蒲生郡上駒月請へ坪付状事



合恒元者秘佐郷 神主請

限東大上宮ヲ限北ハ牧山犬引ヲ 西ハ十三昧をかきる
限西千本そとハヲ限南常引立道ヲ

駒月東六段 榎木東新開一反

東新開一反 同南新開一反

谷脇 一反 同二切五反

榎木百文祝給分

頭木西二切東新開一段内三百卅ト

以上一町五段三百卅歩本田七反三百卅五十ト

分米參石三斗七升三合 檢注之年ハ年貢半分
又相そへて入へき物也

右仍請坪付狀如件

保司代(花押)

明応九年 庚申 霜月七日

注1 「合恒元者秘佐郷 神主請」に注意。つまりこの請坪

付狀記載の諸項目が、秘佐郷(比都佐) 内の上駒月の
皇太宮神主の請所であることである。

2 端書の「於此内ニ万難公事、不可有之旨也」の意は、
本年貢以外の諸役の免除のことか。

⑤ 近江国蒲生郡上駒月請坪付状

大神宮御領近江国蒲生郡上駒月坪付状

〱 検注代官権之禰宜渡会 〱 文條 (花押) (異筆)

〱 合老町五段三百卅步

上駒月 〱 神主請

〱 四至限 東大將軍 南ぬのひき立道
西千本ソトワ 北牧山犬引

〱 分米 三石二斗

〱 土別 壹石二斗五升内

〱 勘料 共ニ

〱 榊本 百文

右定請坪付状如件

永正九年 壬申 十一月七日

保司代 (花押)

注1 『近江蒲生郡志』所載。写真の図版あり。

⑥ 近江国蒲生郡日野牧請坪付 (26.8×17.8)

大神宮御領近江国蒲生郡日野牧請坪付状

検注使権禰宜度会神主貞泰 (花押) (異筆)

一町五段三百卅分四至限 (歩) 東大上宮南ぬの引立道
西千本そとワ北牧山犬引西へ十三昧

〱 分米 三石三斗七升三合

上駒月 〱 神主請

〱 勘新 年八年貢半分そへにて可取候也

〱 土別 一石二斗五升にてふせ申候

〱 榊本 百文

右請坪付状如件

保司代 (花押)

大永四年 甲申 十一月

注1 ここでは「日野牧」となっているが、その四至を検すると、前の請坪付状と同一なので、これも上駒月のものである。以下①②まで総べて同じ。④との関係でいえば、日野牧内に秘佐郷や上駒月郷など数郷があったと思われる。

⑦ 大神宮公方目録注文

定太神宮御公方入之目録之事

合

字坂内尻 一斗

七年之内一度見注 六升

寅申歳 衆

惣 方

字坂内尻	一斗三升	寅申歲見注	六升 錢三十三文	下駒月	孫衛門方
字坂内尻	五升	寅申歲見注	六升	与三郎	
字	一斗	見注	六升	道善	
字七斗代	一斗二升	見注	六升 錢卅三文	民部公	
字大平	一斗	見注	六升	意内	
字大平町田	一斗	見注	六升 錢卅三文	兵衛二郎	
字町田	一斗	見注	六升 錢卅三文	若衛門	
字町田	一斗	見注	六升 錢卅三文	三郎左衛門	
字細房	一斗	見注	六升 錢卅三文	神主方	
一斗		見注	六升 錢卅三文	社	
一斗二升		見注	六升 錢卅三文	衛門三郎	
字乙谷	一斗三升	見注	七升 三十三文	五郎左衛門	

(此間一枚不足)

字向井アカリト	三升	見注	三升 錢十六文	兵衛四郎太夫	
字釜ヶ淵	五升	見注	六升 錢三十三文	五郎左衛門	
字釜カヰキ	五升	見注	六升 錢三十三文	民部	
字河原	五升	見注	六升	辻衛門三郎	
字河原	五升	見注	六升	太夫五郎太夫	
字河原	五升	見注	六升	東衛門	

字河田	一斗二升	見注	六升	社僧坊	
字小堤	七升	見注	六升 錢卅三文	神主方	
字小堤	七升三合三勺	見注	六升 卅三文	秋道方	
字コンマイ田	五升	見注	三升	下駒月	
字ンミッシリ	五升	見注	六升	藤岡	
			三郎衛門		
			左衛門		
			藤二		
			両人		

右定大神宮公方目録注文状如件

天文四年乙未八月二日

主(花押)

注1 『近江蒲生郡志』所載。

2 公方入とは「公方年貢」のこと。その意味については、重松明久氏は「花園制のもとにおける、夫役・雑公事による系譜をひく名主得分」といい、三浦圭一・勝俣鎮夫氏は「花園制における本年貢」と規定している。後者の解釈に従う。本文中の二段めがそれに相当すると思われる。

3 この形式が、いわゆる坪付状である。次号⑧との関連で述べれば、この坪付状が在地側で作製され、これをもとに、翌年、伊勢神宮より検注使を迎えて、その結果、「請坪付状」が作られている。

⑧ 近江国蒲生郡日野牧請坪付状

大神宮領近江国蒲生郡日野牧坪付状

〱 檢注使権禰宜度会神主 〱 貞泰 (異筆) (花押)

〱 一町五段三百卅步 恒元 上駒月

〱 神主請

〱 四至限 東大上宮 南ぬの引立石
西千本そとは 北牧山犬引又西ハ古三昧

〱 勘料年ハ年貢半分そへ候て可請取候也

〱 分米三石三斗七升三合

〱 榊本百本

〱 右請坪付狀如件

〱 天文五年 十一月七日

〱 保司代 (花押)

注1 『近江蒲生郡志』所載。写真図版の掲載あり。

⑨ 近江国蒲生郡日野牧請坪付狀 (26 × 40.0)

太神宮御領近江国蒲生郡日野牧坪付狀

檢注使権禰宜度会神主 〱 正親 (異筆) (花押)

一町五段三百卅四至 東大上宮南ぬの引立道
西千本ソトワ 北牧山犬引西十三昧

〱 分米三石三斗七升三合 上駒月神主請

〱 勘新年ハ年貢半分そへて可取者也

〱 榊本 百文

〱 土別 一石二斗五升

右請坪付狀如件

天文十一年 十一月

保司代 (花押)

注1 端裏書に「太神宮請帳 上駒月神主□□」とある。

⑩ 近江国蒲生郡日野牧請坪付狀

太神宮御料近江国蒲生郡日野牧坪付狀

檢注使権禰宜度会神主 正親 (花押)

一町五段三百卅四至 東大上宮 南ぬの引立道
西千本ソトワ 北牧山犬引西古三昧

〱 分米三石三斗七升三合 上駒月神主請

〱 榊本 百文

〱 土別 一石二斗五升

右請坪付狀如件

天文十七^{戊申}十一月吉日

保司代(花押)

注1 『近江蒲生郡志』所載。

⑪ 近江国蒲生郡日野牧請坪付状 (27.7×29.0)

(前欠)

勘料

四石八斗六升三合也

榊本

此内四石四斗五升当年ノ弁也
百文

土別

硯石貳斗五升

右請坪付状如件

天文廿三年

甲子

保司代(花押)

上駒月神主方へ

注1 「上駒月神主方へ」の宛名のみえる唯一のものである。

内容的には、これ以前の総べての請坪付状にも、この宛名に相当する意味があるべきである。

⑫ 伊勢内宮風宮内人某掟書 (33.5×49.5)

掟

一、伊勢殿と尊伴

累を吹申間敷事

一、喧嘩口論堅停止事

一、六ヶ寺連判不持輩者

於国々在ニ急度可致

覃鑿者也仍如件

内宮六箇寺

風宮橋南

元和八年正月吉日

壬戌

与大夫

定盛

(朱印)



(黒印)

注1 近世的な社寺統制によつて在地における郷社の領主的機能は消滅した。しかし、過渡的なものとして伊勢神社は依然、地方の末社に支配的地位を有していたことがわかる。

四 上駒月坪付状の検討

以上紹介の古券類のうち、とくに⑦坪付状一通と請坪付状九通をとりあげて、その考察を試みたい。すでに本文中で注記したように請坪付状のうち⑤・⑧・⑩は、『近江蒲生郡誌』に所載のものである。その解説によると、「三通は何れも保司代が調整せし坪付状に神宮の禰宜が袖判を加へしものにて、東西南北の四至を表し、其段別は老町四段三百卅歩にして、分米は三石二斗及三斗七升三合の小異を見る、外に榊木料百文を納付せり、検注は七年目毎に寅申の年を以て行はれたるは注意すべきなり、検注の前年の秋に神領目録を製して之を神宮に納めたり、前記天文四年八月二日の目録注文（本文⑦の文書）は三紙の中一枚を欠くと雖も、即ち翌天文五年申年の検注使の準備として調製せしものなり、此の目録の初めに七年之内一度見注、寅申歳とあるは、六年を経る毎に一度の検注を定めたるを記するも、前記の検注使の坪付状の年数を見るに何れも申年にして十二年目毎に相当するは、寅年の検注を省略せしものの如し。」といっている。この説明は大筋においては正しいが、今回新追加の六通を加えて、併せて考えてみると、なお二、三の事実関係について訂正されなければならないし、その歴史的考察においては、更に多くの問題を想起させる。

まず、「分米は三石二斗か三斗七升三合の小異を見る」の説明であるが、これは、⑥・⑨などに「此内一斗ひきもの」の注記のあることによってその差異は説明されよう。つまり、これは保司代が分米を上納する際の出目分としての調整分と考えてよいであろう。また、「寅年の検注を省略」の説明は、②・⑨・⑩などの存在から、省略されずに、現実に六年ごとに請坪付状の提出が行われていたことを示めす。これも、この期における神宮領のあり方を考える場合には、重要な事柄であると思う。つまり、この段階でも一般にいわれているように、在地領主の侵略の前にその神領の実態は崩壊に傾いていたのではなく、伊勢神宮はかなり確実に在地把握をしていたことがわかる。他に、右の説明で抜けてしまったこととして、保司代の位置づけ、上駒月神主請の意味、「勘新年は年貢半分そへて入へきもの也」、及び「土別」の解釈をどうするかであろう。

保の成立や村落との関係については、すでに、竹内理三氏（『保の成立』、『末永博士還暦記念論文集』所収）や、河音能平氏（『院政期における保成立の二つの形態』、『中世封建制成立史論』所収）などがあるが、その理解は成立期と思われる院政期に集中して、以後の、とくに中世後期での実態にふれたものは皆無といった状態である。ここでは一応、河音氏の理解に従って、保を領主的保と農民的保に大別した場合、上駒月（狗月谷の教郷を含めての保であったかも知れない）が、その成立期において、どういった範疇に属していたかが問題であるが、残念ながら、その期の適切な史料を欠いているので推定の域を出ないのであるが、その地理的要因から考えて、国衙領における在地領主の私領として成立したと考えるよりも、先に近江の諸例で触れたように、成立当初から、特定の権門寺社（封戸主）、つまり、ここでは伊勢神宮に隸属する神人・寄人集団であったと考えるのが、より自然であると思う。

その意味で、上駒月を農民的保と考えるなら、その保民の神人・寄人的性格を問題としなければならない。しかしながら、一方において保といい、神人・寄人と言っても、その後の荘園制変質、解体過程をみれば、ここで問題にしている中世後期においては、その成立期の性格をうんぬんすることが、どれ程有効なのか疑問である。その点、本史料及び近郷の同形態の村落史料などから、この時期に即した解釈を進めるのが至当と思う。そういった意味で、改めて請坪付状の作製者として現われる保司代についていえば、本来は荘園諸職における公文・下司職に相当する身分のものであろうが、この時期では、すでに在地領主化が相当に進んだ結果としての土豪層と考えられ、その土着した実力によって、神宮領の坪付状および請坪付状を作製していたものと思われる。また、「駒月神主請」の意味は、この記載地域全体が、保内勧請の皇太宮の神主の請所となっていたことを示すものであろう。つまり、⑩の宛名に見られたように、この請坪付状そのものは、上駒月の神主方へ出されたものである。前述したように、この文書の作製者は保司代であるが、その袖に領家である神宮の代官「検注使権禰宣度会神主某」の証判があつて初めて正式書類として成立したものであろう。こういった点より考えて、これらの請坪付状に示された一町五段余の田地は、伊勢神宮領として、郷内上駒月の神主の請所となっており、その下に文書⑦に示されているような一般の耕作者がおり、その田地全体にかかる年貢が「分米三石三斗余」に相当していた。この部分が、保司代を通じて領家としての伊勢神宮に入る主なもの、他に、「勘料年八年貢半分そ

へ候て可請取候也」(④・⑧)とか、「榊本百文祝給分」(④)とか、さらにその実態はよくわからないが、「土別老石二斗余」などの名目で、付加税を収納されている。この場合、この田地一町五段余の生産高は不明ではあるが、その面積比より考えて、これら神宮への上納分の合計よりも数倍の生産力があったはずであり、そういった部分が、保司代、上駒月神主、作人などによって配分されたわけである。それが具体的にどういった割合で配分されていたのかは、これだけの史料では明らかではないが、前述したように、近隣の、とくに史料の豊富な得珍保今堀郷などと比較することによって、こういった点もかなり鮮明にできるのではないかと考える。

また、時期的に、守護領国制から、戦国大名領国制への転換期にあたるわけであるが、この上駒月を含む駒月谷が、いったいそういういた在地の地域的封建領主とどういったかわり合い方をしていたのかも究明せねばならない事柄である。『滋賀県史』によると、佐々木六角高頼が勅免されて、観音寺城に入ったのが明応六年正月であり、その配下から起った蒲生貞秀の本拠は、駒月谷に近い日野城であった。大永二年七月には、蒲生氏の内乱があり、六角定頼がこれを攻めて、城を破却している。天文六年八月には、その定頼が正式に近江国守護職に補任され、以後、浅井氏との抗争に入っていくことになる。そういった在地の政治情勢の変化のもとで、駒月谷のみが、伊勢神宮領として、領主権力と無関係であったとは考えられない。具体的にどういったかわり合い方をしていたのかは明示できないが、本文書で見る限り、保司代の性格なり位置づけをきちんとすれば、こういった問題にもある程度答えられると思う。その点も残念ながら、今後の課題としておきたい。

なお、その後の調査によって一、二明らかとなったので、付記しておく。『近江日野町誌』(昭和5)によると、日野牧は桐原郷を中心に数保からなり、檜物庄と混称せしものという。また、日野牧庄は、早く藤原氏の荘園となり、後に小別して法成寺領、祇園社領となったが、日野氏の所領もまたその内にあり、『建内記』や『兼宣記』によれば、観応二年に貢租千百貫文で守護請となり、足利義教に至って日野牧庄を鳥丸豊光に与えたとある。更に、『蒲生文書』には、建武三年に、蒲生郡内日野牧上保内成安名と見え、その成安保の保司職については、同じく『近江日野町誌』に次のような説明がある。

弘安二年九月、龜山上皇院宣を下して、成安保の保司職を藤原氏の女に安堵せしめらる。保司職とは文字の如く保の司にして成安保の下司なり、院宣左の如し、(中略)この院宣によれば、藤原氏の女の家には既に成安保の保務を先代より相伝せしを知る。依つて按ずるに、此頃本郡の上部に一族繁茂する藤原氏あり。別れて蒲生、饑俄、和田、小谷、室木、狛月氏となる。とあり、やや時期は遡るが、駒月(狛月)保と隣接する成安保の状況を述べている。これらのことから考えても、駒月郷は当初、日野牧庄内に含まれており、漸時、保単位で郷村に分立する過程で、前出の狛月氏などが、その保司代となつて、独立した村落共同体に脱皮していったのではないかと思われる。しかし、こういつた過程のどの段階で、伊勢神領となり、それが固定化したのかは明確ではないが、ここに紹介の諸券文や、『近江日野町誌』所載の院宣を検した限りでは、前述したように、近郷の蒲生御厨・佐々木御厨と同じく、その契機を院政期に求めざるを得ない。

(一九七一・七・五)